

第4章 市民意識の調査とこれまでの取り組み

1. 市民意識の調査

中津市では、これまで様々な場面で市民の意識調査を行ってきました。それらから見てきた市民の意識を尊重し計画に反映させます。それぞれの調査結果の詳細は巻末資料に掲載しています。

(1) 平成27年度の「沖代条里アンケート」

文化財課(当時)では、沖代地区条里跡(通称：沖代条里)保護の方策を探るため、条里景観を良好に留めている農振地域内の地権者・耕作者(中津市在住者のみ)を対象に、対面でのアンケート調査を実施しました。対象者142人中75人から回答を得ました。

条里の価値を聞いたことがある人は「条里は守るべき」と回答された方が多く、「守る必要がない」と回答された方は、条里を知らなかった人に偏っている傾向があり、価値の周知の大切さを感じました。また、「営農ができる対策をとってもらえれば残していい」という意見も多く、文化財保護と営農の両立が大きな課題であることが浮き彫りになりました。

(2) 平成28年度の「市民アンケート」

総合政策課が平成28(2016)年の中津市総合計画策定時に行った意識調査です。無作為抽出した18歳以上の市民3,000名を対象にアンケートを行っています。回答数1,122件(回答率37.4%)その中で、歴史文化や自然景観にかかわる部分に注目してみると、芸術文化や伝統的な景観などに対する住民の関心が他の分野に比べて低く、同時に、それらを継承していく人材の減少や高齢化が進行していることから、文化財を保存・活用する意識の醸成が必要であることが伺えました。

さらに、市が取り組んでいる主な具体的施策のうち、歴史文化・景観に係る項目についての調査結果から、便利で暮らしやすい街を望みながらも、城下町や「耶馬溪」(国名勝)などの景観を大切に思い、文化芸術に触れる機会が得られる心豊かな生活を希望している住民の割合が多いことが伺えました。

(3) 平成29、30年度の「やばけい未来スタートアップ会議」の市民意見

平成28(2016)年に中津市と玖珠町で取り組んだ「やばけい遊覧一大地に描いた山水絵巻の道をゆくー」が日本遺産に認定されたことを機に、平成30年、それぞれの自治体の歴史文化資源を共有の財産として受け止め、両自治体の住民が未来を語り合う「やばけい未来スタートアップ会議」を開催しました。参加者は小学生から大人まで年齢・職業・立場も様々で、各回100名程度(内、80%が中津市民)が3回集まりました。ワールドカフェ形式でふるさとへの思いを語り、具体的な行動に結びつけていく建設的な会話の場となりました。



写47：やばけい未来スタートアップ会議

参加者からは、「四季折々に美しく、魅力あふれる中津をこのまま未来に伝えたい」「他の地域の方々にも知ってほしい」という思いがある一方、「多くの観光客が訪れることで静かな美しい環境が破壊

されることを恐れる声」も多数聞かれました。また、「高齢化・過疎化により、未来への継承が困難になっていくことを危惧する声」があがり、「地元に住んでいる自分たち自身が魅力を伝える側になりたい」という声が多く聞かれました。中津の魅力ある資源を活かして自ら活動したいという人々が潜在していることを確認できました。

2. 文化財保護に関するこれまでの取組み

これまで中津市では、文化財の保存・活用に向けて、様々な取組みを行ってきました。効果をあげている事例もあれば、試行錯誤を繰り返している事例もあります。以下、平成以降で、現在の文化財行政に影響を及ぼしているものを中心に、個々の取組みで経験した課題や解決策を俯瞰することで、目指すべき将来像へのヒントを探ります。

《表7：中津市の文化財保存・活用の事例》(令和5(2023)年8月現在)

事例1	市営住宅移転から、国史跡としての価値を伝える場所へ
【内容】平成7(1995)年、市営住宅建替えに伴う調査で、県内初となる郡衙遺構が検出され、古代下毛郡衙の正倉跡と判明しました。保護すべき遺跡と評価されたことから、市営住宅居住者のご理解・ご協力を得て、市営住宅は別の場所に移転し、遺跡の保存整備が決定しました。平成22(2010)年2月に国史跡となり、平成27(2015)年3月には「長者屋敷官衙遺跡保存管理計画」を策定し、現在整備を進めています。周辺には同時代の貴重な遺跡が集中しており、史跡関連遺跡を一体として整備活用する方針となっています。	
【今後へのヒント】多くの市営住宅居住者の協力により遺跡が保護されることとなりました。その重さを受け止め、国史跡としての価値を伝え、市民に親しまれる場所として整備していく必要があります。関連する文化財群を面的にとらえて整備活用する方向性が出されています。	
事例2	中津城石垣保存問題から博物館開館へ
【内容】平成12(2000)年に国土交通省の「まちづくり総合支援事業」として始まった中津城の堀と石垣の復元工事は、当初、埋め戻されていた中津城本丸南側の堀を水堀に復元すると同時に、石垣を解体して新たな石垣に造り変えるものでした。しかし、黒田官兵衛が築いた九州最古の近世城郭の石垣であることが判明し、協議を重ねた結果、解体目前で工事を変更。文化財調査と並行しながら「石垣の価値を落とさない」修復工事を行いました。今では、「九州最古の近世城郭の石垣」として市民の誇りとなっています。令和元(2019)年、石垣前に中津市歴史博物館を新設し、石垣ビューを活かして様々な取組みを実施しています。	
【今後へのヒント】石垣を解体から保存・修復へ方針転換したことで、石垣の眺めを活かした博物館ができました。「文化財保護が活用につながる」ことを象徴する場所となりました。	
事例3	市民による羅漢寺石仏の調査から重文指定へ
【内容】羅漢寺の調査は、市町村合併した平成17(2005)年より地域振興の観点から着目され、地元有志による本耶馬溪文化財調査研究会が、地域の宝を再発見すべく、別府大学の協力を得て境内の石造物調査を行いました。その結果、五百羅漢をはじめとした石仏群が日本最古の作例であることがわかり、中津市・大分県・文化庁による文化財としての詳細調査により平成26(2014)年に国重要文化財に指定されました。	

【今後へのヒント】地域の活動が国の評価に結び付いた事例です。調査研究会はその後、観光ボランティアとして地域振興のために活動しています。

事例4 市民の調査をもとに城下町の景観形成、地域による運営へ

【内容】平成18(2006)年、「NPO法人中津まちなみ会」では、旧城下町の民家や建物の建築様式、時代などを調べ、「中津城周辺建物分布図」を作成しました。中津市は中津まちなみ会からの景観形成にむけての提案を基に、「中津市景観計画」における「景観形成誘導地区」「景観形成重点地区」の指定を行いました。景観形成誘導地区の諸町では、江戸時代の商家(市有形)を公開施設とすることになり、修復にあたっての課題を中津まちなみ会・市のまちづくり担当課と文化財担当課が協力して解決しました。現在は、地域の方々によって管理・運営される「南部まちなみ交流館」として城下町景観を形成する無料休憩施設となり、様々に活用されています。



【今後へのヒント】江戸時代の建築物を改修する際の様々な課題を、NPO法人と市が協力してクリアした事例です。管理運営を市民が担い、継続的な運営を行っています。

事例5 アーカイブズ講座の開催と襖下張文書の保護

【内容】中津市では平成21(2009)年度からアーカイブズ講座を実施しています。中津市が保管する古文書を講座の教材として提供することで、教育の場・専門分野の人材育成に協力するだけでなく、市の文化財の有効活用を図ることを目的とする事業です。古文書やアーカイブズを専攻している大学生・大学院生や、中津市が開催している「古文書を読む市民講座」を受講している市民等を対象としています。資料の保存や修復技術についての座学と、旧家の襖を使って下張りを剥がし、貼られている古文書を救出し保存・活用を図る実習を行います。



【今後へのヒント】複数大学の連携事業として行われており、大学側が求める次世代の専門的な人材育成を目的としておりと同時に、地域課題となっている埋もれた史料の発掘と保存・活用を目的としています。

事例6 条里景観保全へのチャレンジ

【内容】沖代平野に残る条里跡は、圃場整備をしないままの方形の水田で営農が継続している九州最後の条里遺跡です。また、条里内にわずかに残る土水路は希少生物生息域です。コンクリート水路化を希望する地域の人と協議を重ね、生物が生息できる様に、石積みによる水路整備を行いました。条里展望施設を設け、毎年土水路で生物観察会を開催しています。このエリアについては、「中津市景観計画」(平成22年)には「歴史的景観の保全」が、「中津市都市計画マスタープラン」(平成29年)には「歴史・文化資源に配慮」がうたわれています。しかし高齢化や後継者不足により、営農が難しくなっていることなどもあり、水田景観が減少しています。



【今後へのヒント】営農や開発と文化財保護の両立が問題となっています。何を大切に、どういうまちづくりを進めていくのかといった長期ビジョンを地域で共有する必要性のある事例です。

事例7 自然災害から石橋の保存、地域活性化へ

【内容】平成24(2012)年、九州北部豪雨により耶馬溪で大規模な水害が発生し、大正時代の石橋「馬溪橋」は洪水の一因とみなされました。地元住民からは馬溪橋の撤去・架け替え要望が出され、国(国交省と文化庁)、県、市、地域住民とで約2年間にわたり、議論・協議を尽くしました。最終的には「橋を残した上での安心安全な河川改修」の方針を固め、平成27(2015)年に「名勝耶馬溪 馬溪橋周辺地域整備活用マスタープラン」を策定しました。これは、国・県・地域も策定に参加して、防災・流木対策・観光振興・文化財保護等の様々な方面から、対策と「石橋と共存する未来」への活用を考えたプランです。石橋の保存は、「やばけい遊覧〜大地に描いた山水絵巻の道をゆく〜」の日本遺産認定に繋がり、橋は市指定から県指定有形文化財となりました。



【今後へのヒント】市が全庁的な体制をとり、さらに国交省・文化庁・県・地域住民とともに、災害・文化財保護・地域活性化という地域課題に取り組んだ事例です。その後、市民主体の様々な取組みが活発になりました。橋を造らせた人物の邸宅「平田家住宅」が国登録有形文化財になり、「平田邸活用推進協議会」が発足し、ゆかりの「旧平田郵便局」が人々が集う場になるなど、多面的な広がりをみせています。文化財を地域で守り活用していく好例となっています。

事例8 日本遺産認定により、地域が主体のアクティビティ誕生へ

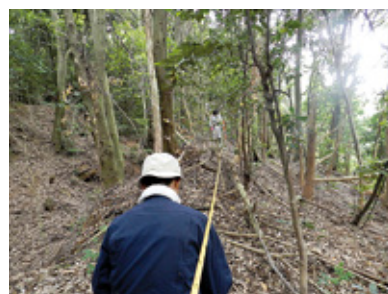
【内容】平成31年春、「やばけい遊覧」の日本遺産認定ストーリーを活かした体験型観光コンテンツを地域の方がつくり地域が収入を得る「やばはく」(やばけい遊覧博覧会)が開催されるようになりました。中津市と玖珠町でつくる「中津玖珠日本遺産推進協議会」は、全体の調整と広報を担当しています。耶馬溪の歴史文化の特徴を活かした、山や谷をめぐるトレッキング、パラグライダーで空から遊覧、サイクリングロードの活用、食とからめた探検、古民家の活用など多彩なアクティビティが生まれ、主催者の市民がガイドを務めています。年々認知度が高まり、春と秋の年2回開催が定着してきています。



【今後へのヒント】自らが地域の魅力を伝える主催者としてかかわる市民が増えています。地域の文化財を活用することで地域に収入が入り、地域が活性化し、文化財保護へとつなげていくひとつのモデルとなる可能性を秘めています。

事例9 地域の協力で多くの中近世城館を確認

【内容】中津市では平成25年度から令和3年度の9年間にわたり、市内の中近世城館の確認調査を行いました。その結果、推定地も含め約140か所の城館の所在が確認されています。文献調査、地籍図調査、縄張り図作成などの諸調査を行うとともに、老人クラブや地元の方にも地名等の聞き取り調査を行い地域に残る城郭遺構の掘り起こしに努めました。多くの市民の協力を得た調査の結果、新たに古文書や織豊系城郭が確認されるなどの成果を得ました。報告書として資料編や総括編が刊行され、中津市の中近世城館を調べたい方々のベースとなる調査となりました。今後の文化財指定や修復事業等にも役立てます。



【今後へのヒント】城館の広域な把握調査を市民の協力で達成でき、今後の保存・活用につなげるための基礎資料を得ることができました。聞き取り調査の難しさから、保護の担い手が不足していることを実感しました。

事例10

中津市歴史民俗資料館から新たな中津市歴史博物館開館へ

【内容】中津市では、昭和13(1938)年建築の図書館を改修し、平成4年から中津市歴史民俗資料館として活用してきました。長く市の文化財保護行政の拠点でしたが、展示ケースが不十分で、展示室・収蔵庫とも温湿度管理ができず、建物は老朽化が目立ち、資料館としての活動を十分にできませんでした。そのため、令和元年、中津城内堀沿いに、中津市歴史博物館を新設しました。新博物館は様々な業務に対応するため、多分野の学芸員を配置しています。調査研究・資料収集・企画展示といった博物館業務と、文化財の保存・整備・活用業務を連動させ、文化財に親しむ様々な事業を実施しています。



【今後へのヒント】文化財の保護と調査・活用の拠点を整備することができました。市民が歴史文化に親しむ機会を創出し、市民の宝を大切に未来に伝える役目をはたしていきます。中津城横という立地を活かし、中津市全体の観光拠点の役割も期待されています。

事例11

藩医屋敷保護から「蘭学の里」へ、他自治体と連携する「三津同盟」

【内容】中津市は、元中津藩医の屋敷である「大江医家史料館」と「村上医家史料館」という2つの医家史料館を運営しています。貴重な遺産を保護したいという市民の働きかけによるものです。平成15(2003)年より専門家による史料調査を行い、毎年『医家史料館資料叢書』を刊行するなど、資料の掘り起こしを行ってきました。平成29(2017)年からは、国文学研究資料館との協力で、史料のデータベース化を進めています。しかし、中津＝蘭学・洋学の町として十分認知されているとはいえ、貴重な財産を活かしきれていない状態です。令和3(2021)年、岡山県津山市と島根県津和野町と大分県中津市の間で「三津同盟」が結ばれました。優れた蘭学者・洋学者を輩出しているという歴史的背景の共通性や、名称でも「津」の文字を共有していることが発端となっています。津山市・津和野町と同盟を結び、教育面や観光面で3市町が協力しあい、「博物館マネジメント」や「城下町観光としての魅力アップ」等、共通する課題について情報交換し、高めあうことが期待されています。



【今後へのヒント】「蘭学の里 中津」を提唱した市民の働きかけにより、医家史料館を保存し公開施設としたことがきっかけとなっています。「蘭学・洋学の町」を、他自治体と連携することで効果的に発信しています。

事例12

“オールなかつ”で「不滅の福澤プロジェクト」推進へ

【内容】旧中津市歴史民俗資料館(国登有)の新たな活用を検討した結果、福澤諭吉の提唱により明治期に開校した「中津市学校」にちなんで「新中津市学校」と命名し、令和元(2019)年、交流学习施設となりました。市の福澤諭吉研究の拠点施設と位置付け、収蔵庫を整備し、慶應義塾福澤研究センターのご協力によりセンター所蔵の福澤諭吉関係資料の一部を分散収蔵することで万が一の際の資料減失に備える役割も担っています。また、令和6(2024)年に一万円札の肖像が福澤諭吉から変更になることを機に、福澤諭吉を“オールなかつ”(中津市内の団体・個人だけでなく、中津に縁のある方々、団体等含む)で重点的に顕彰し、肖像が交代しても、福澤諭吉の偉業を末永く後世に伝えていこうという「不滅の福澤プロジェクト」が発足。市や民間団体等が積極的な事業展開に取り組んでいます。



写59 不滅の福澤プロジェクトロゴ

【今後へのヒント】福澤諭吉を初めとした郷土の偉人顕彰を核に、中津市と市内の団体だけでなく大学や中津に縁のある方々と協力して事業展開を行う体制構築が進んでいます。